

ページ	協会ニュース ガイドの豆知識【山田武彦】			
13	その13	2020年(令和2年)	3月号(274号)	大航海時代と堺
14	その14	2020年(令和2年)	5月号(276号)	“矢銭2万貫”は現代ではいかほどか？
15	その15	2020年(令和2年)	7月号(278号)	なぜ「小さな茶室」は作られたか
16	その16	2020年(令和2年)	9月号(280号)	茶室の歴史
17	その17	2021年(令和3年)	2月号(285号)	信長と利休について
18	その18	2021年(令和3年)	4月号(287号)	秀吉、利休お黄金(きがね)の茶室について
19	その19	2021年(令和3年)	6月号(289号)	利休、秀長、妙國寺
20	その20	2021年(令和3年)	8月号(292号)	利休、天下一の大宗匠
21	その21	2021年(令和3年)	2月号(297号)	北野大茶湯の前後の利休と堺・博多
22	その22	2022年(令和5年)	2月号(297号)	政治家としての利休
23	その23	2022年(令和5年)	4月号(299号)	利休の死
24	その24	2022年(令和5年)	6月号(301号)	利休の死後



ガイドの豆知識 13 大航海時代と堺

【山田武彦】

大航海時代とは、15世紀におけるポルトガルとスペインの海外進出を皮切りに、16世紀後半には両国に加えてイギリス、オランダ、フランスなどが、非ヨーロッパ世界における領土獲得と植民地交易をめぐる覇権を争った時代である。これは喜望峰を廻ってインド洋に出でる新航路が発見されて極東の新天地を開拓するに至ったからである。この大きな流れの中で日本も、否、堺も無傷ではなかった。色々なものが入ってきたが、主なものでは、先ず始めは鉄砲の流入だろうが、これについては「全体研修会」で勉強するであろうから、私は触れないでおこう。

次に特筆すべきはキリスト教だろう。「極東の新天地は、ただに貿易のために開拓されたばかりでなく、キリスト教もまたここに神の福音を伝えんと努力した。ポルトガルやスペインの商人の足跡を印したところ、影の形に伴うがごとくに、宣教師が続いた」我が国においても、始めてポルトガル商人が我が国を発見して早くも7年後に、宣教師が来ている。それが耶蘇会(やそかい=イエズス会)の宣教師として有名なフランシスコ・ザビエル師その人で、ザビエルがマラッカに居た頃、鹿児島島の僧侶でアンセイ俗名弥二郎というものが、ポルトガル船に乗って、中国からマラッカに参り、ザビエルはこの日本僧及びポルトガル人から、日本人の特性を聴き、彼らにキリスト教に帰依すべき素質のある事を洞察し、マラッカを出発した。ここにおいて日本でのキリスト教の開山たるザビエルが誕生するのであるが、彼が去った後にトルレスやビレラやフロイスなどが相次いで日本に来ている。堺が西欧文化の入り口だけでなく、化学、工芸、その他の事物のこの地に伝来したものは少なくなかった。今年特に特筆すべきは、フロイスは「本能寺の変」について、この人「変後」約十年後に表している「日本史」の中で、「本能寺の変」の一つのきっかけと言われる「信長による光秀殴打」を述べている、NHKの大河ドラマでどう取り上げますか。



平成24年・春季文化財特別公開パンフレット 小西行長と堺ゆかりの戦国武将

それはさておき、話を西欧文化の移入に戻すと、地球の丸いこと、南蛮流の医法、銅から銀を抜く法(南蛮吹)、緞子(ドンス)、硝子器(ビードロ)、革、南洋の香料、ルソン壺等多くのものがあります。これは要するに足利時代末期の開国文化は、堺を除外しては語る事が出来ない、言い換えるならば、堺は動かしがたい主要の地歩を占めているのです。欧州諸国に向かって開放された当時の堺は、すこぶる光輝ある歴史をもっていたのです。キリスト教は言うに及ばず、西欧の学術も堺に伝わり、物質文明としては、海外貿易によって、ヨーロッパ、インド、南洋、中国、その他、各地の産物を輸入し、国民の視野を広げ、趣味を向上させたことは認めないわけにはいかない。ただ特筆すべきは、堺の人々はこれだけの富をもって自身の軍事に使わなかったことだ。例外は商人から興って24万石の大名となった小西行長だけである。これを見ても堺の人々がどれだけ平和を望んでいたかがわかる。

今回は戦国武将の堺に対する態度について述べてみることにしよう、お楽しみに。

参考文献 『大阪と堺』 三浦周行 岩波文庫 金子拓 『信長家臣明智光秀』 金子拓 平凡社新書
『戦国日本と大航海時代』 平川新 中公新書
平成24年・春季文化財特別公開パンフレット『小西行長と堺ゆかりの戦国武将』 中公新書

ガイドの豆知識 14 “矢銭2万貫”は現代ではいかほどか？

【山田武彦】

織田信長は堺に、その経済力と独自の自由的精神にしばしば悩まされたが、結局のところ直轄地として代官を置いた。そして命令したのが「“矢銭2万貫”の提供か、“堺の焼き払い”のどちらを取るか」である。この時堺の衆は、「矢銭2万貫は痛い事は痛いだが、出して出せない額ではない。それよりも出すべき2万貫を“死に金”にしたくない。さてどうするか」との思案の結果、矢銭2万貫を選んだのである。それでは、堺の衆の“死に金、生き金”とは、“後の商売につながるかどうか”であろう。なるほど後の信長の活躍ぶりを見れば、武器・兵糧・船舶の需要等で、どんどん堺は儲けたはずだ。



矢銭2万貫とは現在の貨幣に換算するといかほどか、それについての興味深いものがあった。それはNHKの大河ドラマ「麒麟がくる」のホームページにおいて、3回解説している。第1回と第7回、第12回で、「1貫=約15万円、100貫=約1,500万円」と述べている。したがって、2万貫=約30億円になる。*（「麒麟がくる」の時代考証は小和田哲男先生—静岡大名名誉教授）堺は30億円をポンと出せるほどの経済力があり、それから後は、信長は堺を利用して戦に勝ち、堺商人もそれにつれて大いに儲けたのである。信長の後を継いだ秀吉は、堺の町よりも大坂の都市開発に力を入れ、全国から文化の異なる多くの商人を集めた。そして、身分に関係なく才覚のある者だけが生き残る、という実力主義社会ができた。いわば本拠を大坂に移して城と町を築き、ここに一大食糧庫を作って天下の台所としたのである。そして、堺の商人を全部ここへ連れてきて、その結果、堺の町は昔日の面影はなくなった。それ故に、今は亡き大徳寺の立花大亀和尚の「利休に帰れ」にあるごとく、「太閤はんは悪い人やで。堺をとうとうこんな目にあわした」という人が堺には多くいるのです。

そう言えば、「堺の町のシンボル」ともいえるべき「環濠」を埋めたのも秀吉であった。次に天下人となった家康は、堺には恩があるので堺町人を保護、糸割符（いといわっぷ=中国産の生糸を一部の商人が独占的に輸入する制度。慶長9年(1604)に制定）の占有権を与えたのである。この制度で、中国から持ち込まれた生糸を買うことができるのは、糸割符仲間に指定された限られた商人だけで、その商人が価格を自分たちで決めて一括購入をし、その後一般の商人に売り渡すのである。糸割符仲間は、最初に京都・堺・長崎の3都市の商人、のちに江戸と大坂の商人が加わり「五カ所商人」とよばれた。生糸を買うことができるのは糸割符仲間だけであるから、かれらは大きな利益を上げることができた。後に江戸幕府は、「環濠」を以前あったよりも一回り大きく掘り返して堺人の関心を買おうとしたが、いかんせん鎖国政策で以前のような賑わいを取り戻すことはできなかった。堺の近世は貿易よりも工業へと変わってゆくのである。今回は「茶」の事を書こうと思います、お楽しみに!!

参考文献

『利休に帰れ』 立花大亀和尚 主婦の友社 OSTOMS

ガイドの豆知識 15 なぜ「小さな茶室」は作られたか

茶道を理解するにあたって何から入るか、色々入り口があろうが先ず茶室から説明しましょう。「市中の山居」この言葉は過去の誰が言ったかははっきりしないのですが、町なかにあって田舎風の建物とは何だろうか。簡単に言うと一軒の家があって、その家が「離れ」を持っているとしよう。母屋は近代的な建物であるのに対して、茶室である「離れ」は一見前近代的に見える建物です。しかしながら自然環境の中で育った木を使っているので、伝統的な木造技術は、知恵の宝庫として普遍的な価値があります。例えば、数寄屋(すけや)大工(茶室や数寄屋建築を専門とする大工)の技術では、「丸太を扱う技術が発達した」等、このようなことを知った上で「市中の山居」と言われる茶室を見られてはどうでしょうか。これ以外にも、茶室ならではの技術は壁塗り、屋根葺き、畳、石等を扱う職方の技術や手法に見られます。



妙喜庵・国宝「待庵」

その上に「狭い」例を挙げると、待庵は二畳敷という最小の茶室です。茶室を小間の系譜にばかり注目して、一方には広間の系譜があることを忘れてはならないが、広間が一貫してハレの場たることを主張するのに対して、小間はますます縮小化の道をたどった。

二畳といえば、亭主が茶をたてるための一畳を除いて客に許された空間は一畳しかないのです。ここへ座りますと客も亭主もふるまいを制限され、行動の上でも日常世界を特異体験の場へと誘われる。なぜこのような狭い茶室が好まれたのか。即ち「粗末な藁ぶきの小屋」への回帰である。



待庵（京都府観光連盟）

「昔、珠光（村田珠光）申され候は、“わらやに名馬をつなぎたるが好し”と、旧語にある時は、名物の道具をそそうなる座敷に置きたるは当世の風体、なおもって面白きか。」（山上宗二記）
 と言うことかということ、粗末なわらやに名物道具を置きなさい、さすればその名物道具は目立つでしょう、と言っているのです。「強い対照性をなす取り合わせを珠光は推賞した」のです。

「二畳敷の座敷、関白様（豊臣秀吉）にあり、是は貴人か名人か、さては一物ももたざる侘び数寄か、この外、平人には無用なり。

また宗易（千利休）、京に一畳半の始めて作られ候。当時、珍しき事なり。是も宗易一人の外はいかが。 “山を谷、西を東”と茶の湯の法度を破り、物を自由にす。

ただし、宗易一人の事は目聞きなるによりて、何事も面白し。平人、宗易をそのまま似せたらば邪道と云々。茶湯にてはあるまじき者」これも宗易（利休）が茶の湯の名人だから許されたことで、一般の我々がやると猿真似になりますよ、と言っているのであって、“茶の湯の極意は自分の創意工夫にあるのだ”と言っている。

以上茶室を例に茶道の考え方を述べてきたが、まだまだ奥が深い。しばらくお付き合いください。



妙喜庵・国宝「待庵」

参考文献

熊倉功夫『山上宗二記』岩波文庫 熊倉功夫『茶の湯文化史』日本放送出版協会
 谷端昭夫『茶話指月集を読む』淡交社 桑田忠親編『茶道名言辞典』東京堂出版
 池田俊彦『茶道雑誌 2018年1月』河原書店

ガイドの豆知識16 茶室の歴史

茶道というものが、日本特有な一つの総合的な文化体系であるということは、誰でも認めるものがあります。その始まりはといいますと、足利義政(室町幕府第8代将軍)は、同朋衆(どうぼうしゅう)と言う、今でいう文化人を多く召し抱えておりました。その中に村田珠光(むらたじゅこう)という方がおりました。義政はこの人を含む4人に新しい茶の湯の礼法の制定を命令しました。珠光は大徳寺の一休和尚に深く帰依したのです。一休に参禅した珠光は、印可の証として圓悟(えんご)禅師の墨蹟(ぼくせき)を与えられます(山上宗二記)。ここに茶禅一味の萌芽が見られ、これにより村田珠光を茶の湯の開山と言います。

村田珠光の考えた茶の湯の礼法は、まず書院(広間)を一丈(10尺、約3m)四方に屏風で囲い、その中に台子(だいす)を据えて、この中に風炉、釜、水指、杓立、建水、蓋置などを納めて茶礼を行ないました。これが今日に伝わる茶道礼法の始めと伝えられています。なぜ広間を一丈四方に囲ったかという点、色々説がありますが、仏典に詳しい村田珠光の発案という説(茶室の話 江守奈比古)が一般的かもしれませんが、寺の住職の居室が一般的に方丈(一丈四方)であるというところから来たという説。また、「色即是空」是は即ち真に覚った者には一切皆空という理論に基づく説(岡倉天心著『茶の本』)もあります。



炉のない時



炉のある時

一番有名なのは、維摩経(大乘仏教經典の一つ)によりますと、釈迦在世のころに維摩居士(ゆいまこじ)という人がいて、この人の居室が一丈四方でした。この狭い室に維摩を慕って仏説を聞きにくる仏徒、菩薩を何十人でも何百人でも収容したとの故事から、そこは維摩の方丈室(一丈四方の部屋)と言われました。その方丈室にヒントを得て一丈四方に囲ったという説です。

村田珠光は奈良の称名寺の僧侶でした。最後は奈良に帰りそこでお茶を普及させたので、その流れを汲んだ人々のことを「奈良派」とい

います。概して奈良派からはさしたる茶人はでませんでした。そして奈良派のお茶はすたれますが、その流れを汲んで、やがて堺で発展してきます。奈良と堺は非常に近く、最も早く奈良から堺へやってきた茶人は今井宗久です。彼は奈良の今井村の出身で、堺へ出てきて商売を始めたのです。城山三郎氏の『黄金の日』に納屋助左衛門のことが出てきますが、実は彼らは根っからの堺人ではなく、みんなよそから堺へ来て金もうけをたくらんだ、いわゆる〈一旗組〉なのです(立花大亀・利休に帰れ)村田珠光が奈良に隠棲したときの居室は6畳間であったと記されています。実際に茶室としての4畳半ができたのは、珠光の次の時代の武野紹鷗に始まる、というのが適当であろうと思われます。と言いますのは、江守奈比古によると、「紹鷗の前半期は、台子以外の色々な棚の類を発案して、その棚物を使つての茶の湯が流行していた。紹鷗の後半に至って、弟子の千利休と合議して定めた、冬期間(今の11月から翌年の4月まで)は畳に炉を切つて、これに釜をかけるという形式が、田舎家らしい侘しきがあるとして一般にも流行してきた。この畳に炉を切る発明が、茶風に大きな変化をもたらした。それまでは、どの座敷でも風炉釜を移動させればそれでよかったが、炉を切ることになると家の中の特定の座敷、すなわち茶室というものが必要となる。」というのです。(江守奈比古前提書)

茶室は四畳半を以って広間と小間に分けられますが、四畳半はどちらの分類でもよい、とされているのです。いよいよ次から利休の工夫に入ろう。お楽しみに!!

参考文献 『わびの茶道』 久松真一 燈影舎選書 『茶の本』 岡倉天心 岩波文庫

ガイドの豆知識17 信長と利休について

紹鷗のアドバイスをうけて堺流と言われた茶道から利休流へと変えていった利休(与四郎、宗易)が弘治元年(1555)紹鷗と死別する。それ以後利休は一人で茶の湯の工夫をする。その工夫がどのようなものを書きたいと思っていますが、その前に天下人たる織田信長、豊臣秀吉、徳川家康との絡みを書いてみたい。

織田信長と千利休はいつ頃関係を持つのだろうか。『今井宗久茶湯日記抜書』によると、永禄13年(1570)4月2日の条を見ると、堺の茶人として先輩格の今井宗久が、その前々年(永禄11年)に岐阜から上洛してきた尾張の武将織田信長の御前で濃茶を賜わったが、この朝会で千宗易(利休)は薄茶を点てている。千利休と信長との関係が確かな文献



に見えるのは、おそらくこれが初めてであろう。時に宗易は47歳であった。(『千利休』桑田忠親)さらに同書によると、天正元年(1573)京都の妙覚寺での信長の茶会でも点前をおこなっている。翌年即ち天正2年(1574)3月27日、信長は津田宗及らを連れて奈良に下向し足利義政の前例にならい、東大寺正倉院の御物の「蘭奢待」という名香木を一寸八分ほど切り取り、その翌月3日、京都相国寺の茶会が終わると、津田宗及と千宗易の二人だけにその「蘭奢待」一包みずつ下賜している。

その理由は、宗及が「不破香炉」を、宗易が天下一の「珠光香炉」を、それぞれ所有しているからだ、というのであった。この二つの名物の香炉を秘蔵している2名の茶道界での地位をよく認識して、これに御物の名香木を与えたのである。これをもって見れば信長は単なる武断政治ではなく茶道文化、強いて言えば日本文化の伝統に十分な理解と敬意をもっていたことがわかる。

信長は日本文化に十分な理解と敬意をもっていたのがわかるが、一方の利休は世の中をどう見ていたのか。ここに珍しい古文書がありそれは信長の印判状である。内容は「信長が越前の一方向一揆を討伐するにあたって鉄砲の玉千個を堺の町に注文し、それが着いた」というものである。そして、その宛先が宗易即ち利休であった。利休は今井宗久らとおなじ堺の商人であり、鉄砲も扱う死の商人でもあったのだ。信長が比較的短日月に今川、斎藤、浅井、朝倉の旧大名を制圧しえたのは新兵器たる鉄砲戦術のおかげであった。この鉄砲の製造所は南蛮鉄を輸入する堺の港であった。信長は、堺を制するものは天下を制すると考え、その堺の衆と仲良くする仲立ちが茶の湯であった。この方法は、信長の後継者秀吉も受け継いでいた。

「信長は翌天正3年10月28日(1575)京・堺の茶人17人を招いて京都の妙覚寺において茶会を催している、茶頭は千宗易が務めた」ここで初めて信長の傘下の人とわかるのである。宗易54歳の時である。武将信長の死はあまりにも唐突であった。それは本能寺の変の前夜に、わずか70余人の小勢をもって京の本能寺に宿泊したことにも起因する。この事は武将としての不覚さからのみならず、一介の茶人としては東山伝来の大名物38種と終わりを共にしたことにもなったのである。この間、師の紹鷗は弘治元年10月急死しているが、時に54歳、利休は34歳であった。北向道陳は、永禄11年(1568)に没している。利休もそろそろ半白という年齢に達する。昔は50歳というと、もう老人扱いされた年齢であったが、利休は、それから70歳で死ぬ天正19年(1591)までの23年間で彼の活躍の時代となった。すなわち50代は信長の茶頭、60代は秀吉の茶頭というように、それぞれ10年を単位として仕え、20年にわたる茶頭生活を送ることになった。

参考文献 『千利休』 桑田忠親 中公新書 『信長公記』 太田 牛一著 中川太古訳 新人物文庫
『茶室の話』 江守奈比古 学習研究社 『千利休』 村井康彦 日本放送出版協会

ガイドの豆知識 18 秀吉、利休と黄金（きがね）の茶室について

天正 10 年(1582)に信長が本能寺の変で討たれると、「三宗匠（堺の豪商茶人、津田宗及、今井宗久、千利休）はそのまま秀吉の茶頭となったが、首座に置かれたのは、信長の下で末席にあった宗易である。秀吉は信長以上に茶の湯に傾倒して利休を重用、政治的にも重要な補佐役を務めさせる。」（橋本麻里・黄金の仮想現実）

「秀吉の存在がなければ、その後の茶の湯の歴史はまったく違ったものとなり、あるいは現在まで続くこともなかったかもしれない。秀吉がいて、その下に宗易がいたことが、その後の茶の湯の歴史を決定的に方向づけたといって過言ではないだろう」（神津朝夫・茶の湯の歴史）と言わしめている。

それでは秀吉と利休が関わったものを年代順に 2,3 上げて見ると、「現存最古にして究極のわびの茶室、と称される〈待庵〉からして秀吉が宗易に命じてつくらせた茶室だと伝わっており、成立時期も天正 10 年付近であることは、大方の一致するところだろう。ここから自刃までの約 10 年」、宗易は「山を谷、西を東と茶を湯の法度を破り、物を自由にす。」（山上宗二記）と、「侘び茶の理想を求めて疾走する。そしてその傍らには、常に秀吉の存在があった」（橋本・前提書）

天正 13 年（1585 年）7 月秀吉・関白就任 同年 10 月 7 日宗易を連れて御所へ参内、正親町（おおぎまち）天皇をはじめ数人の公家達を客に迎えて禁中茶会を開く（これが、武家のものだった茶の湯が公家の世界へ公式に持ち込まれた最初になる）

この時に宗易が「利休」の居士号を賜った。（しかし利休という字をいつどこで誰にもらったかは定かではありませんが、この時に勅許されたことは事実です）

天正 14 年（1586 年）1 月 16 日に前回とほとんど同じ顔ぶれで 2 回目の禁中茶会が開かれる。ここで黄金の茶室が登場する。「この後で茶室は大坂城に戻されたらしく、イエズス会の宣教師なども見ている」との記録もある。「そして翌年天正 15 年（1587 年）北野大茶湯に際して広く一般に公開され、天正 19 年肥前名護屋城へ持ち込まれた記録を最後に、行方が分からなくなる。」

ここで問題なのは、この茶室の制作に利休が関わったかどうかですが、この時代の利休の存在価値の大きさから見て関わらない方がおかしいと私は思います。それではこの茶室に利休の理念は生きているかどうか、幸いなことに協会の大部分の皆様は過去に「利晶の杜」においてこの黄金茶室の復元されたものを見ておられる。不幸にして見なかった人に言うと、詳しい茶室の説明は避けるが、結果として「黄金の時代」と言われる桃山時代、「黄金尽くしの茶室もまた、天皇を迎えるハレの空間、聖なる空間として、皆金色をもって荘厳された。この世ならざる場を現出させることに成功しているのである」（橋本・前提書）

“黄金の・・・”というだけで“金ぴかの”俗悪な成金趣味を想像してはいけない。言うなれば仏殿に座って仏さまを見ているような感覚であるが、これは黄金と光との調和は見逃せない。

ここに“芸術家”としての利休の存在価値を見るのである。もう一度思い出してほしい「藁屋に名馬つなぎたるがよし」といった茶の湯の開山「珠光」以来の、茶道の伝統的趣向といってよく、そこに、珠光流茶道の理念と伝統を受け継いだ堺の茶湯者千利休の茶事に対する見識を感得することができる」（桑田忠親・千利休）のである、

「この黄金の茶室も、バブルの時代の金満紳士の金のロレックスとは違い、茶の湯の歴史におけるあだ花では決してない」（橋本・前提書）



ところが大抵の識者はここを見逃している。それが証拠に御所に持ち込まれる前年に秀吉と利休は御所において茶会を、2回目と同じメンバーで催しているではないか。これこそ黄金の茶室のこの場所に合うかどうかの下見を兼ねた偵察ではなかったか。即ちこの茶室の持ち込みは実に綿密な計算の上に成り立っているのである。

注・・・古来より「鉄はくろがね」といい、「銅はあかがね」「金はきがね」という（桑田忠親著『千利休』）また『「きがね」は「こがね」に同じ（広辞苑）

参考文献： 桑田忠親『千利休』 中公新書
熊倉功夫校注 『山上宗二記』 岩波文庫

2021年(令和3年)6月号(289号)

ガイドの豆知識19 利休、秀長、妙國寺

秀吉の下で利休の仕事は、御茶頭八人衆の筆頭として三千石の知行をいただき、茶人としての社会的な地位も天下にならびなきものとなった。それにしても、秀吉にとって利休の存在は大きな誇りであった。色々な用向きの人達が大坂城の秀吉のもとを訪ねてくる。例えばひとたび秀吉の軍門に降った地方の大名が陳謝のために大坂城に参上した時をはじめとして、地方の大名で秀吉の力を借りたい人達、その他秀吉の御機嫌とりにくる大名小名等多くの場合がある。そのような場合、秀吉が案内するのは天守閣、本丸の黄金（きがね）の茶室、名物茶壺飾りの座敷であったが、それと同時に天下一「茶の湯の名人」としてのその名も高い利休を側近に置き、その点前で大名達に茶を飲ませるのが得意中の得意であった。

その他にも名物葉茶壺の飾ってある五つの座敷の二つを兼ねて管理させ、他の茶頭たち（一つずつ管理）よりも上席あつかいであった。かくのごとく秀吉と利休は持ちつ持たれつの関係であった。秀吉の勢力も中国地方の毛利一族と和睦し、その勢力を借り四国をも平定する、という勢いであった。利休の隠然たる勢力が、大坂城の大奥や豊臣家の政治・外交の方面にいちじるしく反映されてくるのもこの頃からであった。

ガイドをなさる人にぜひ知っておいて欲しい事柄を次に書こう。それは天正14年の4月に豊後の太守大友宗滴（宗麟）が九州問題で大坂にやってきて秀吉に会った際に、例のごとく大坂城内を見物させた後に利休に命じて茶をたてさせているが、その時のことである。大友家伝来の「大友文書録」（東大史料編纂所蔵本）には天正14年4月5日、大坂城内で歓待を受けたありさまを、翌日になって宿舎である堺の妙國寺で丹念に手紙を書き、国元の家老衆にあてて報告したものがある。その中に秀吉とその周囲の人々との関係について感想を述べたところがある。

現代文に訳し記載すると「この美濃守（羽柴秀長）殿は、はるかにほど遠くからわざわざ近づいて来られて、宗滴（宗麟）の手を取られ、『何事につけても、この美濃守は、このような気持ちでいるから、安心なされよ。内々の儀は宗易（千利休）、公儀の事はかくいう宰相（羽柴秀長、美濃守秀長）がよく存じているのだから、悪いようなことは、けっして、しないはずだ。これからいよいよ御昵



千利休

羽柴秀長

近（じつきん）に願ひましよう』と言われて諸万人のなかで宗滴と手を取り組んだ。実にかたじけないことで、これこそわれらの真に頼み入るべき御方である」と、宗滴は心から感激の言葉を書きつら

ねている。一方利休に関しては「(この大坂城内の様子を見るにつけても)利休でなくては、関白様へ一言も申し上げる人もいないと観察した。だから秀長公と利休には慎重に、隔てなく、お近づきになることが肝要である」と述べているところである。(手紙の内容も大事であるが、堺のガイドとしてはこの手紙が妙國寺で書かれたことが重要であろう)

さて、この秀長と利休については、秀長(美濃守)は秀吉の実弟であるからこのような権力を持って不思議はないが、利休は秀吉の御茶頭八人衆の筆頭とは言っても茶人であり、堺の町人である。それが秀長と並び称せられるほどの権勢を握っていたということは、いかに茶の湯好きの秀吉のお気に入りであったにせよ、じつに驚くべきことではなかろうか。

「九州における大友家の立場を最も有利ならしめんとして上坂し来たった西海随一の数寄者大友宗滴の観察眼にいささかの狂いがあるかもしれない。ともあれ天正 14 年当時の御茶頭利休の大坂城内における隠然たる権勢を如実に物語っているといつてよい」

このようなことであるので利休に対する「ねたみ」「そねみ」も表に出ないが、裏では大変なものであったろうと考えられる。それが故に数年後の悲劇につながるのではないだろうか。

今回はもう少し秀吉と利休の二人の茶会を書いてみよう、お楽しみに。

参考文献 『千利休』 桑田忠親 中公新書 『定本千利休』 桑田忠親 角川文庫
『茶道名言辞典』 桑田忠親 東京堂出版

2021 年(令和 3 年)8 月号(291 号)

ガイドの豆知識 20 利休、天下一の大宗匠

「内内の儀は宗易(千利休)に、公儀の事はかくいう宰相(羽柴秀長、美濃守秀長)がよく存じているのだから、悪いようなことは、けっしてしないはずだ」大友宗麟(宗滴)が今に残した『大友宗滴上坂日記』は、宗滴がこの日、すなわち天正 14 年 4 月 5 日に、大坂城内で歓待を受けたありさまを、その翌日になって宿舎の堺の妙國寺で丹念に筆記し、国もと豊後の家老衆に宛てて報告したものであるが。

それにしても同じ宗久や宗及と違って利休だけがなぜこのように重要な側近者になりえたのか。

少なくとも出発点においては同じ条件、同じ可能性があったはずだ。結局最低限言えることは、茶の湯において発揮された彼の作意は、そのまま世事においても通用するすぐれた立案・企画力として秀吉に尊重されたということである。秀吉政権とはいふものの、この時期では十分な権力組織がつくられていたわけではない。おのずから非制度的存在としての、こうした特定個人が権力者に接近しその才能を発揮するという状況が存在していたのである。



大友宗麟

さて宗麟が去って 5 ヶ月後、大坂城に今度は東から徳川家康が上がって来た。秀吉は、家康とは天正 12 年(小牧・長久手の戦い)以来休戦状態にあったが、不気味な存在である家康と、なんとか妥協をはかろうとした。秀吉は、結婚して家庭をもっていた妹・朝日姫を夫婦別れさせて、その夫が切腹するという犠牲を払ってまでも、なりふり構わず岡崎の家康に嫁がせたのである。しかしこれに対して家康は、使者として榊原康政を上坂させただけであった。康政は秀吉や利休の茶事にも招かれて手厚くもてなされたが、それだけでは不安を感じた秀吉は、家康との会見を求めて一再ならず上坂をすすめた。その結果、家康も今が潮時と判断し上坂を承諾した。秀吉もそれに対するいわば人質として母の大政所を岡崎城に送っている。

『千利休由緒書』によると、「家康の一行が天正 14 年 10 月 26 日宿舎に到着したと聞いた秀吉は、早

馬でかけつけ、利休はといえば棗(なつめ)の茶入を襟にかけて秀吉に従い、家康のお茶弁当に茶を点てて献じたという。それより節々家康様御前へも利休まかり出て御懇に御座候」と。利休がのちに政治的には家康に近い立場に身を置き、それが彼の悲劇の要因となることを思えば、こうして始まる家康との結びつきは、利休の生涯における重要な一齣(ひとこま)であったのである。

年が明けて天正 15 年(1587)正月、博多の豪商神谷宗湛(かみやそうたん)は堺にいた。前年 10 月末に九州を出立して、11 月以来京都・奈良・堺の茶人を歴訪していたのである。同行は宗伝ら博多衆数名であった。彼らが正月 2 日天王寺屋道叱主催の昼会をしているところへ宗及からの手紙が届いた。

「明日 3 日大坂城にて関白様が大名衆と大茶湯をされるので、富田左近将監知信のとりなしであなたにも茶を下されることになった」との内容であった。それで宗湛は「関白様のお召である」と、とるものもとあえず大坂城に向かった。そして夜に入って大坂城に着いた。宗及と石田三成に迎えられ、三成に酒肴のもてなしを受けている。

翌日正月 3 日寅の刻(午前 4 時)から大坂城に登城、城門の外で初めて利休と会った。この大坂城の大茶会は、上洛した宗湛を饗応せんがために催されたらしい。その後宗湛はいろいろと優遇され、満足感をもって日を送った。そして翌 4 日には三成のところに御礼参りにでかけている。

ここで留意したいのは、宗湛の上坂に石田三成が深く関係していたらしい事実である。それは、秀長の言を待つまでもなく利休としても絶頂にあったこの時期に、将来の敵対者となる三成が秀吉の官僚として徐々に活躍し始めたことを示唆しているからである。またこうした宗湛の上坂は秀吉の前に博多衆が大きくクローズアップされてきたことを意味し、その結果として堺衆の地位の相対的低下を招来するのである。

しかしその結果があらわれるのはもう少し先のこと。この時期利休はなんといっても“天下一の茶の湯の大宗匠”であった。

次はいよいよ北野の大茶会である・・・

参考文献：『千利休』 村井康彦 日本放送出版協会

『千利休』 桑田忠 中公新書

2021 年(令和 3 年)11 月号(294 号)

ガイドの豆知識 21 北野大茶湯の前後の利休と堺・博多

天正 13 年(1585)9 月	64 歳	利休居士号を勅賜される
〃 10 月	64 歳	秀吉の禁中茶会で後見を務める
天正 14 年(1586)	65 歳	秀吉によって堺の環濠が埋められる
天正 15 年(1587)1 月	66 歳	九州出陣前の大坂城大茶会で利休 1 席を担当
〃 6 月	66 歳	利休博多箱崎燈籠堂で茶会を催し、神谷宗湛・島井宗室らを招く
〃 10 月	66 歳	北野大茶会 秀吉の 4 席の内の 1 席を担当する

という具合に利休はまだまだ秀吉の茶頭としての地位は安泰に見える。天正 15 年 5 月島津氏の平定に成功した秀吉が、博多の町割りを行ったのち大坂に凱旋したのは 7 月 14 日のことである。

この年 10 月 1 日秀吉は北野天満宮の社殿、境内から北野の松原にかけて前代未聞の大衆的な大茶会を開催している。これを、北野大茶湯(きたのおおちゃのゆ)と称する。利休が 66 歳の初冬である。この大茶湯の開催に先立ち、9 月 10 日に関白殿下秀吉と千宗易と津田宗及の 3 人が北野天満宮の神前に大茶湯無事達成のための祈願をおこなっている。そして 10 月 1 日、日本の茶の湯史上、最大級の茶会が始まるのである。

この茶会の目的なり趣旨は「茶の湯に熱心なものならば、誰が来てもよい。茶がなければ、米を焦

がしたものに、湯をかけて飲ませてもよい、さらに、日本人ばかりでなく、数寄心のある者ならば、唐国からもやってこい、(そしてさらに)来ない者は今後、茶を点てることまかりならぬ。」(高札の一部)というものである。利休は秀吉の4席の内1席を担当する。

これは天皇はじめ公家達とした宮中茶会、同じく大名衆を客とした大坂城茶会、身分を特定しない北野大茶湯と記録に残る秀吉の茶会において重要な位置を占めている。さて、これほどまでに大騒ぎをした北野大茶湯も当初予定していた10日が1日で終わる。(肥後国人一揆が原因?)

ここで後日談が生まれる、九州の神谷宗湛(かみやそうたん)のことである。宗湛は宗及の取次で秀吉の朱印状を受けた時は、上洛するには都合が悪かったのであるが22日に立出し10月4日大坂に着いている。しかし天候の悪いままに船中で過ごし8日に上洛し、その日秀吉と宗及の屋敷で対面している。秀吉は北野大茶湯に遅れたことを怒るかと思いきや「カワイヤ、ヲソク上リタルヨナ、ヤカテ茶ヲノマセウツヨ」とのことで14日に宗及と2人で茶会に招かれている。この茶室は宗湛のために作り上げたもので、秀吉は「是(このこと)ヲツクシ(筑紫)ニテ人々ニ語り聞セ申候へ」と言ったといい、21日、大坂城の山里曲輪の数寄屋に宗及と2人を呼び大いに歓待している。こんな具合である。

この歓待はただごとではない。宗湛や島井宗室ら博多豪商との接近は、九州征伐の前より顕著となっていたが、すでにこの時期秀吉の脳裏には博多の向こうにある外国への出兵という不遜な野望が芽生え始めていたのではないか。そう言えば北野大茶湯の高札において「唐国の者までも」と呼びかけているのではないか。

宗湛はこうした茶事を通じて、じつはその深みにずるずると引きずり込まれていたのである。

そしていまひとつの後日談から考えられることは、秀吉と博多商人宗湛の接触には宗及が深く関わっており、利休の関与が見られないということである。しかしそれ以上に秀吉と宗湛の関わりに石田三成が深く関与しているのが見逃せない。

さて、その頃の堺の様子はどのようなものであったか。実は環濠は埋められ、堺の商人は大坂に移住を命じられて段々と堺の覇気と実力が失われてゆくのである。「博多(福岡市博多区)は古くから、東アジアへの日本の窓口だった。古代には大宰府(福岡県太宰府市)の外港である大宰博多津として繁栄し、中国へ向かう遣隋使、遣唐使もここから出発していた。博多は中国や朝鮮に近く、海外へ通じる都市として栄えたのである。

博多では博多商人が活躍の舞台を広げ堺と並んで自治権を有していた。つまり、自治都市として発展を遂げたのである。博多商人は貿易都市・博多の繁栄を基礎にして、さらに自治的団結を固めるようになった。室町末期に至ると、12人の行司が市政を運営することになった。



戦国時代は戦火にあって荒廃したが、天正15年に豊臣秀吉が九州入りすると、方十町の町割(太閤町割)による博多の復興が行われた。(現在の博多地区は秀吉による都市整備によって、この頃に完成した。そして、商人の町として、再び発展をはじめたのである)つまり神谷宗湛に代表される都市「博多」の勃興と、利休に代表される都市「堺」の没落がまさしく対照をなしてゆくのである。しかし、北野大茶湯はまさしく秀吉と利休の最も緊密な協力によって可能であったのである。

今回は政治的人間としての利休を書いてみたい。お楽しみに。

参考文献:『千利休』 村井康彦 日本放送出版協会 『千利休』 桑田忠親 中公新書

『日本史探訪』 唐木順三 筑摩書房 『日本史小辞典』 坂本太郎 山川出版社

ガイドの豆知識 22 政治家としての利休

天正 10 年(1582) 信長は殺される。新たな天下人となった秀吉にとって、利休はなくてはならぬ人物であった。茶の湯が権威を輝かすのに必要な文化になったからである。茶会も再々開いた。その度に利休が必要だった。

その結果、利休の力は茶の湯以外のところでも強くなり、「宗易ならでは関白様へ一言も申上ぐる人これ無しと見及び候」という文章を大友宗麟が堺の妙國寺にて書いたごとく、政治的にも利休は秀吉の片腕と言える程の存在になっていた。



天正 18 年(1590 年)は利休 69 歳。利休と秀吉との価値観や考え方による衝突も十数年は続いていた。小田原征伐の陣中での利休は、茶事に明け暮れていたわけではない。伊達政宗の見参に何かと幹旋するところがあったのである。なおこの小田原征伐に関連する話として、当時、北条氏に仕えていた利休の弟子でもある山上宗二であるが、早雲寺で秀吉を罵倒することで殺されたのである。(南宗寺塔頭の天慶院に供養塔あり)

この頃、利休を取り巻く世の中の動きは大きく変わろうとしていた。

まず、政治の中心が大坂に移っていた。この大坂は「信長公記」にもあるごとく「日本一の土地である、奈良・堺・京都に近く、(中略)同時に四方が自然の要害となっている。(中略)大坂の城の足元まで 3 里、4 里の間は大小の河川が広範囲に流れている。西は、広々とした海で、(後略)」

秀吉は大坂城の建設に取り掛かる。しかし城南の方は高台続きで、守るに難く攻めるに易い地形をなしているの、この方面に空堀を築こうとしたものであった。その延長線上に堺が有り、同時に、堺、河内、平野、淡路等の商人を集めて城下町を造った。そして 1586 年に堺の環濠も埋められ、自治組織をもって繁栄した都市も、大坂の衛星都市としての位置に成り下がってしまった。

天正 18 年 7 月、秀吉は農民や武士や商人や職人に転職を禁止した「身分法令」を出した。士商工農という身分を限定し、分離させてそれぞれの職分に専念させた。普通、士農工商の身分制度は徳川 3 代将軍家光のころだとされているが、それは、この制度の完成期をいうのであって、すでに秀吉の国内平和秩序の基本的政策として、制定されたものである。

さてそうすると利休の立場はどうなるか。

参考文献：『千利休』 桑田忠親 中公新書 『千利休』 村井康彦 日本放送出版協会
『堺都市探訪』 中井正弘 ホウユウ(株) 『信長公記』 太田牛一 (株)KADOKAWA

ガイドの豆知識 23 利休の死

利休は大徳寺の山門におのれの木像を置いたことを直接の理由として、堺の自宅に謹慎を命じられる。利休の書簡によると「天正 19 年 2 月 13 日に富田左近将監知信と柘植左京亮の両使によって追放の旨が告げられ、即日聚楽第の不審庵を出て堺に下向した」その後、同月 28 日自刃の命を受けて自裁し、その首は京都まで運ばれて問題の寿像とともに聚楽の戻橋で獄門にかけられたものとみたいところではあるが、一般には再び京都に召し寄せられて京都で自刃したように言われている。年 70 歳。



利休の賜死理由としては前記の木像一件のほか、その娘を側室に所望されたが利休が拒絶した、更に秀吉毒殺未遂事件というのがある。次に利休がキリシタンで改宗しなかったため、その次に秀吉の朝鮮出兵に利休が反対したからだという説、また秀吉と利休の思想的対立が相剋へと進みそれが原因だと言う説等等きりが無い。

不思議なことに津田宗及、今井宗久、同宗薫、松屋久政、同久好、同久重ら、利休の同僚茶人たちが黙して何一つ語らない。現存する茶書の中に利休自刃の事実を記録するものが、まったく存在しない。誠に不思議のかぎりというほかない。

私は、利休が秀吉の天下統一の直後、すなわち天正 18 年(1590)の 7 月に制度化した「身分法令」に抵触したものであると思う。この「身分法令」というのは、天下の平和と統一のために、農民は耕作を主とし、町人は商売を主とすべきで、その身分を逸脱するような行動をしてはならぬという法律であった。これは徳川三代将軍家光のころだとされているが、それはこの制度の完成期を言うのであることは以前述べている。それはともかく、千利休を処罰しなければならなかったのも、利休の当時の言行の商人らしからぬところ、商人あがりの御茶頭の身分を逸脱したところにあったのではないかと考えられる。

利休の処罰に少しおくれて同じ堺の茶人津田宗及や今井宗久もこの世から消え去っている。このように、利休を中心とする堺の商人あがりの有力茶人が、秀吉の天下平定とほとんど時を同じくして、没落していったのは堺商人だけでなく、町人の自治都市堺の町の没落をも物語っている。戦国乱世のな堺商人のもつ気骨、気概、言動の自由闊達さ、抱負の遠大さが、一斉に禁圧されたのだ。

参考文献

堺の史的幻影	田島 清	広文堂
堺歴史散歩	徳永真一郎	創元社
利休の死	小松茂美	中央公論社
定本千利休	桑田忠親	角川文庫

ガイドの豆知識 24 利休死後

天正 19 年(1591 年)正月 22 日 大和大納言豊臣秀長(52 歳)死去
 天正 19 年 2 月 28 日 利休自刃(70 歳)
 天正 19 年 8 月 5 日 秀吉の子・鶴松(3 歳・生母淀君)病死
 天正 19 年 9 月 16 日 秀吉、明国出兵の時期を布告、諸将にその準備を命ず
 天正 19 年 10 月 10 日 九州の諸大名をして、肥前名護屋に城を築く
 天正 20 年正月 5 日 朝鮮を経て、明国に出兵せんとして、諸将に出陣を命ず
 (その軍勢は「外征軍約 20 万、名護屋駐屯軍約 10 万、帝都守備軍約 3 万余、通算 33 万余人」
 大正 13 年参謀本部)

さて、みずからの手で利休を死に追いやった秀吉の心やいかに。高麗出兵、愛児鶴松の死と動顛(どうてん)する秀吉の心中からは、もはや利休の幻影は消え去ったものなのか。いや、さにあらず。秀吉は利休切腹の後、日ならずして後悔の臍(ほぞ)をかんだに違いない。

秀吉の 2 通の手紙が残っている。共に東京大学史料編纂所が編んだ『太閤真蹟集』に収まるもの、1 通は、天正 20 年(1592 年)正月 6 日付のもの、【昨日、利休の茶にて御膳も上がり、面白く、芽出度く候まま、お心易く候べく候】これは、秀吉が名護屋城内の山里丸で、利休の流儀の茶事を催して、会席の食事をとったことを、大政所に告げたものである。一時の憎悪で切腹を命じたものの、1 年あまりの後も、利休追憶のままに、当の秀吉が「利休の茶」で食膳に対した、というではないか。秀吉の眼底には在りし日の利休の影像がまざまざと焼きついていたのである。

もう 1 通の手紙は文禄元年(1592 年)12 月 11 日付の手紙。宛名は民部卿法印・前田玄以(京都所司代)である。その文中に【伏見の普請の事、利休に好ませ候て、懇ろに申し付けたく候】とある文言である。むろん、この頃利休は在世しない。然るに「利休を呼んで十二分に好みのままに設計させよ」というようにとれる。

これら 2 通の手紙は、まこと不用意にも、秀吉自身による利休追慕の顔を露呈するものではないか。みずから注罰を与えた憎き利休なれば、ふたたび思いめぐること、またその名も口の端にのぼるはずはない。にもかかわらず『利休歿後の 1 年、1 年半足らずの短い月日の中に、秀吉の心に利休が蘇る』秀吉は、みずから一時の激情に駆られて利休を死に追いやったことを深く後悔していたにちがいない。まさしく、利休切腹の下命は秀吉ほどの人物の悔やみきれない千慮の一失ではなかったか。



(参考文献) 小松茂美 『利休切腹』 中央公論社 桑田忠親 『定本千利休』 角川文庫

山田武彦さんの「ガイド豆知識」は今回をもって終了させていただきます。

24 回の長きにわたって、私たちに沢山の知識を提供していただき、本当にありがとうございました。我々のガイドも、この知識をちりばめながら話をしていくと、更にお客様にも喜んでいただけるのではないのでしょうか。

山田さんに心から御礼申し上げます。

広報部一同